

編集室

* 「社会をもっと頑張らないと…」

* 小学校のとき、理系の我々は、先生から親から苦手科目の国語や社会をもっと勉強しなさいと、よく怒られたのではないのでしょうか？

* 実は、私自身のエピソードがあります。子供が小学生だったときに父母面談なるものがあり、普段無関心な父親(私のこと)への「たまには行ってきなさいよ」という妻からの言葉に後押しされて、行ってきました。親がいうのも変ですが、まあまあいい成績ですし、算数だとか理科だとかが得意の様子といわれると思っていたら、先生は、「社会をもっと頑張らないと…」と言い始めました。

* どうもお話を伺っていると、駄目な点を克服しないと入試には負けてしまうし、社会に出ると困るということがいたい様子でした。言葉を選んだつもりでしたが、「日本人は1億人以上もいるのですから、皆が平均でなくても得意なものを伸ばした方がいいのではないですか？ 中田(サッカー)や松井(野球)のような人が何人出るのが大切なのは？」と、ついつい説教をしてしまったようで、それ以来、父母面談には妻から出席させてもらえなくなりました。

* 大量生産時代はよかったです、いまだに我々の心の中にある弱点補強とか、人の欠点ばかりを見てしまうこと

からは、そろそろ卒業したいですね。学会誌でも、完成度が低くても新しいアイデアは広く掲載するといわれて長い時間がたちましたが、コンサバティブな学会の体質では、一番ミスを恐れて、それができていないのではないのでしょうか？もう一度、考え直したいです。

* 夏になると、大学の研究室の学生と科学教室を数回、ボランティアでやっています。「科学離れ」とか「今の子は手を動かしたくない」というのは全くのうそで、実験のときは、教室中、歓声と笑い声でにぎやかです。毎年科学教室をやらせて頂いている小学校の校長先生が、「高学年ですが、理科が好きな先生が各クラスの理科を教えることにしました」とおっしゃいました。理科嫌いな先生に教わったら、それは嫌いになります。小学校の先生は全教科教えなければならないので、どうしても、苦手や嫌いな科目も担当します。体育の得意な先生がサッカーを教えると、妙に盛り上がりますよね。まずは、好きな人が、その楽しさを教える必要があると思います。文部科学省がとか、教育システムが悪いとかいっているのではなく、せっかくこんなに多くの人材に恵まれた学会です。我々科学に携わる学会のメンバーが、科学の楽しみを、もう一度社会の周りに、子供に広め、電子情報通信が日本で活性化するのを長期的に進める使命が電子情報通信学会にはあると思います。

(編集理事 山中直明)